

一神教にないおおらかな ヒンドゥー教の宗教観が 南アジアの社会と文化に 与えた影響を明らかにし インドの深層に迫る。

キリスト教、イスラム教について、信仰している人の数では世界で3番目に多いのがヒンドゥー教である。大学で宗教に漠然と興味を持ったことをきっかけに、大学院ではインドの古典語サンスクリット語で書かれた、ヒンドゥー教の哲学や神学理論を学ぶことになった井田先生。インドに留学して古い写本を求めて南アジア各地を旅するうちに、ヒンドゥー教が社会や文化のありように大きな影響を与えていることに気づき、研究テーマは大きく広がっていったという。

猥雑でおおらかな 親しみやすさが ヒンドゥー教の魅力

井田先生にヒンドゥー教に興味を持った理由を伺うと、「イスラームのような一神教的な世界とは異なった猥雑さというか、何でもありに見えるところに興味を持ちました。日本と同じように、信者は日々の生活の中でおおらかに自分好みの信仰を選んでいるところに親和性を感じたというか、親しみを覚えたのです」

続けて「南アジアの人々のありようは、宗教伝統によってかなり大き

く規定されています。イスラームの教えが、単に神と人間との関係だけでなく、さまざまな生活規範や社会のあり方に関する規定と考察を含んでいることはよく知られていますが、ヒンドゥー教やジャイナ教などといった他の宗教においても、そうした事情は一緒です。

宗教の教理と実践について学ぶことは、そのままこの地域におけるヒンドゥーの人々のあり方や、さまざまな宗教が共存しつつ展開したインドの社会・文化のあり方を理解することにつながります。私はヒンドゥー教を中心とする宗教文化がこの地域の

歴史の中でいかなる役割を果たしたのか、人々が自らの信仰とどのように向き合ってきたのかといったことに興味を持ち、研究を続けてきました」

インドは仏教の発祥地でありながらその後衰退し、代わりにヒンドゥー教が広まったことはご存じだろう。その理由については「諸説ありますが、ざっくりいえば古代インドの仏教は王朝という大きなスポンサーの支援を受けて、僧院において発展しました。しかしその後、ライバルとなるヒンドゥー教が発展し、さらにインドにイスラーム王朝が侵入すると、有力な支援者を失った仏教教団

は衰退していったのでしょうか。ヒンドゥー教は庶民の間で支持を得て、村々で信仰が支えられてきました。貴族が支持していた仏教は廃れましたが、ヒンドゥー教は民衆に広く受け入れられることで生き延びたのです」と語る。

なぜ、ヒンドゥー教がインドの人々の支持を得たのか。それは何でもありの宗教観だったのではないかという。「ヒンドゥー教は、一つの決まった経典をすべての信徒が同じように信じるというものではありません。神様や経典、流派ごとに異なった教義が説かれたりします。修行が必要だ



井田 克征 (いだ かつゆき)

金沢大学文学部行動科学科卒業。同大学大学院社会環境科学研究科国際環境社会学専攻博士課程修了。インド・ブネー大学サンスクリット・ブラークリット学部留学、日本学術振興会特別研究員、石川工業高等専門学校等非常勤講師、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター南アジア地域研究・龍谷大学拠点研究員を経て、2020年より中央大学総合政策学部准教授。専門は南アジア地域研究、宗教学、インド思想。著書に『世界を動かす聖者たち』（平凡社新書）など。

という神様もいれば、修行しても意味がないという神様もいます。学習しろとか、瞑想しろとか、ヨーガしろとか、みんな言っていることがバラバラですが、どれが正しいとかではなくて、自分にとって一番よいと思わ

れるものを受け入れるというイメージです。一家で同じ寺院に通っていたとしても、考え方が異なったり、家族の中で信仰の対象が変わることも珍しくはありません。宗教というところが神様に対してひたすら真面目に祈る

ものと思いがちですが、たとえば日本でも神社の境内で行われる盆踊りに近所の人々がごく自然に参加するように、そんな日常的な実践の積み重ねがヒンドゥー教を成り立たせているのです」

古文書を求めて 寺院めぐり 広がった研究テーマ

通算で3年ほどインドに留学したという井田先生。ムンバイを州都とするマハーラーシュトラ州のブネーという町の大学で学んだ。ブネーはムンバイがかつてボンベイと呼ばれていた時代に、その避暑地として栄えた古都で、学術都市としても知られている。

「現地ではサンスクリット語で書かれた古いテキストを読むわけですが、テキストといっても古い写本です。田舎の寺院を回って、その古文書を写真に撮って、それを集めて読むわけです。当然、寺院のお坊さんとも距

離感が近くなると、弟子入りしそうなこともありました」と笑う。そうやって20代の頃はヒンドゥー教の神秘思想や、いかにして人は神と一体になるのか、解脱するのかといった神学的問題を扱う教理書やヒンドゥー神話などを読んでいた。そうした宗教書の中には「解脱」への道として瞑想や儀礼の執行を説くものもあったため、文献を読む一方で、実際に儀礼を行っている人たちを訪ねたりもしたという。

先生の最初の著書『ヒンドゥータントリズムにおける儀礼と解釈—



著書『世界を動かす聖者たち』（平凡社新書）と『ヒンドゥータントリズムにおける儀礼と解釈—シュリーヴィディヤ派の日常供養』（昭和三堂）。

シユリーヴィディヤー派の日常供養『(昭和堂)』は、そうした儀礼の執行手順と、その神学的解釈を取り扱ったものだ。

そうした研究を続けるうちに、興味の関心は、民衆的な宗教実践へと向かっていった。

「瞑想や儀礼などの宗教実践は、長い訓練や学識を持ったエリート的な宗教者たちのもので、一般のヒンドゥーたちはもつと素朴に、神を讃える歌を歌ったり、寺院に通つて祈りを捧げたりしています。それに共感し、興味を引かれたのです。そこで民衆的な宗教実践の調査を始めることになりました。現地で話されているマラーティー語の宗教歌や、その地方の聖者伝を調べたり、また実際にお寺や信徒さんの家を訪ねて、話を聞いたりしました。

聖者伝には13〜18世紀頃のマハーラーシュトラ州のヒンドゥー教の様子が描かれています。実際に話を聞いたりするのは現代の人ですから、その辺に大きなギャップはあるのですが、その中でも変わらないものや、

逆に大きく変わったものを探しています。

例えば家を捨てて「出家」することはお釈迦さまの時代から行われてきたことですが、中世においてその実態はさまざまで、男女そろってカッパルで出家したり、出家者同士で結婚したりすることもあったようです。しかしそうした「不純な」出家者たちは、近代化の中でヒンドゥー教の改革運動が進められるうちに姿を消しました。近年では、老後に心穏やかに過ごす一つの選択肢として、出家というものが見直されているようです」

異文化理解には 欠かせない 「他者」への想像力

研究対象が広がったこともあって、18世紀から現代に至るインドの地域研究も先生の専門分野の一つになっている。

「ヒンドゥー教というと、カースト



現地の道端などで売られている極彩色の宗教画。

制度を思い浮かべる人も多いと思います。現在ではカースト差別は法律で禁止されていますが、人々が付き合う上でカーストという枠組みがまづ一番最初に来るといことは、残念ですが今でもあります。カースト内での相互扶助が、今なお大きな役割を果たしているからです。カースト内での掟は非常に強く、しばしば法律を超えています。それゆえに他のカーストの男性と結婚した女性

が殺されるといった悲劇が起きています」

このような異文化を理解する際に、一番大切なことは「他者」への想像力だと先生は指摘する。

「たしかにカースト差別でひどい目に遭っている人たちはいます。それを我々が想像したり、思いを寄せたりするためには、自分の中に正しい知識としっかりした考えがなければなりません。そしてただ頭の中で考え



現代のインドについても深い関心を寄せる井田先生。

るだけでなく、歩みを詰めていくような身体動作としての想像力が必要なのではないのでしょうか。ニッチな分野を扱う者の責任というわけではありませんが、私としては一見自分たちと大きく異なってみえる人々が、実際には自分たちと大して変わらない問題意識を抱え、似たような現代的困難に直面していることを常に明らかにしたいと考えています。ただの「奇妙な」社会や文化を紹介する

だけの存在にはならないように注意しています」

自らが所属しない社会、文化を学ぶということとは常に興味深く、驚きの連続に満ちたものである。それは自分と異なる相手に対する直截な驚きであると同時に、自分に対する驚きでもある。

「インドの文化はこうなんだと知ること、そのまま自分たちにとってこうだったんだと知ることにつながりま

すし、いつも自己の相対化に帰結するのです」と先生は力説する。

さらに「グローバル化した現代社会においては、南アジアに限らず異文化を学び、異文化の人々とともに生きることは必然のことになっていきます。しかし日本では、欧米や東アジアなどに比べると、この地域に関してきちんと理解している人は少ないように思います。時折ニュースをにぎわすような表層的な部分だけでなく、その基層文化や歴史から、より深い理解を得ていくことが重要です」と、研究の意義を述べる。

先生は現在、インドの近代化の中でヒンドゥー教が果たした役割について強い関心を持っているという。同時に、現代的状況の中でヒンドゥー教が大きく変化していく今の時代にも関心を寄せる。

「例えば自家用車で行ける郊外型のモール寺院や、インターネット上で執行されるヴァーチャル儀礼（お布施は電子マネーで決済）などに、多くの人々が流れている現状があります。そうした変化についても研究し

ていきたい」と抱負を語ってくれた。

高校生の皆さんへ

大学で何を学ぶのかという問題は重要ではあるものの、前もって悩んでも仕方ない部分があります。皆さんが大学で何と出会うことになるのか、それはある意味運に任せるしかない部分があるからです。柔軟に、そのときの興味や気分で何にでも飛びついてみて、失敗したら修正したり、やり直したりすればいいのではないのでしょうか。

大切なのは何を学ぶかではなく、いかに学ぶかということです。かけた時間や手間、苦労は決して無駄にはなりませんから。

大学生になったら、学問であれそれ以外の学生生活であれ、日々誠実に取り組む中で、他者のありように対する豊かな想像力を育んでほしいと思います。見たこともない外国の、異文化を生きる人々に対する想像力も、友人や隣人を思いやる心も、その根っこは同じなんです。